
Grim Reaper - birth

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Grim Reaper - birth

【コード】

N36380

【作者名】

あると

【あらすじ】

魂を奪う死神。

何故、彼らは魂を奪うのでしょうか。

望んでやっているのでしょうか。

ある日、少年に似た存在に出会いました。

それは、人間と何ら変わらない死神でした。

窓に反射する自分の顔が見たくなって、暗闇を見ていた。

等間隔で設置された電灯が、壁をぼんやりと浮かび上がらせている。高速で行き過ぎる壁に興味はなかったが、他に見るものもなかった。速度が落ちてきた。四角い看板が現れた。文字は読みとれない。だけど、何と書いてあるかはわかっていた。

「次は、飯田橋」

アナウンスの声で、降車する人間が動き出した。地下鉄のドアが開き、多くの客が降りていった。

「発車します」

警告音がして、ドアが閉まった。

いつもなら、降りていた駅だった。でも、今日は降りたい気分ではなかった。開いたドアと逆側にいたこともある。数分で次の駅に着いた。

「市ヶ谷、市ヶ谷……」

ここで降りても、学校へ行くのに支障はない。都内の乗換駅は無数にあった。

でも、降りなかった。

はじめてのサボリ。そんな言葉が頭に閃いた。

本当はサボりたいわけじゃない。ただ、気が滅入っていた。

気づいたら新木場の駅だった。折り返し運転のため、何人かの客が乗ってきた。がらがらの車内に立っているのも奇異に映る。座席に腰掛け、中吊り広告を見上げた。

目の前に人が立った。

「おはよう」

二十代半ばくらいの紺のスーツを着た女性だった。目があった。自分に挨拶をしたようだった。

知らない顔だ。挨拶を返さないと変なのか、見知らぬ人に挨拶するのがおかしいのか、少し迷う。

「おはようございます」

目が合ったからには、挨拶はしておくべきだろう。

座席が少し沈んだ。女性は隣に腰掛けていた。

「遅刻じゃないの」

時刻は八時を回っていた。

「そうかもしれませんね」

馴れ馴れしい態度が気に障った。極力、平坦な言葉にならないように意識して返事をした。関わり合いになりたいと思わない。しかし、あからさまに避けるのも礼儀に反する行為だ。

「曖昧ね。学校まで、どのくらい時間がかかるくらいわかるでしょう？ 遅刻か、そうじゃないか、すぐに判断できないの？」

絡んできた。酔っ払いかと思いはしたが、さつき合った目は、濁りのないものだった。酒の匂いもしない。いい香りがした。

「あら、お姉さんに興味がある？」

「失礼します」

顔が火照るのを感じた。これ以上は無理だった。強引に始まった会話だったが、途中で席を立つ。

「駄目よ」

手首をつかまれた。引き戻される。よろめいて、身体が倒れそうになった。

やわらかい。

「あ……ん」

女性の胸に顔を預けていた。

「ご、ごめんなさい」

何とも言えない女性の匂いに、頭がクラクラした。ずっとこうしていたい気持ちがあった。

「あの」

頭の後ろを押さえられていた。動けない。やわらかくて、気持ちい

い。

「君のお名前は？」

手が少し緩んだ。

「柏木……秀樹」

普段なら言わない。初対面の人間に個人情報を探らるほど、馬鹿ではない。嘘を言うのも、後ろめたい。だから、黙る。

けれども、名乗らなければならぬと感じた。そう思わせる何か、女性の声から滲んでいた。

「私は竹原美羽。みう姉さんと呼んでね」

「はあ……」

いきなり自己紹介された。しかも愛称つきだ。痛い人なのかもしれない。

腕を解かれて座席に座らせられた。匂いが離れていった。

「あなた、見えるんでしょう」

「え」

真剣な目と出会った。

見透かされているような気がして、つい頷いてしまった。これも、普段なら黙るようなところだ。肯定も、否定もせずに。

車内でいびきを掻く学生。新聞を広げたサラリーマン。孫を連れなお爺さん。彼らの顔に渦巻くものがあつた。

近くでよく見れば、それが何かよくわかる。頬に、額に、アナログ時計が浮かんでいる。それが何を意味するかは、わからなかった。

ただ、他の人には見えないということは知っていた。子供の頃に、おかしなヤツと思われてからは、黙るようになっていた。

「私のは見える？」

「え……ない！」

にやにや笑いが返ってきた。

「君もね」

思わず頬に手をやった。自分にも時計がない。

鏡や窓ガラスは嫌いだった。他人と違う自分が悲しくて、目を背け

る。学校でも、何となく孤立していた。

「仲間」

鼻の奥がじんと鳴った。

「ちよつと待ってくれる？」

潮風に負けない声で、美羽は少女を呼び止めた。

彼女は振り返った。虚ろな目だった。赤く腫れぼったい顔が痛ましい。半開きの口は言葉を発しない。

「少しだけ時間を頂戴」

美羽は学生服の上から少女の腕をつかんだ。少女は振り払う素振りをしたが、あまりにも弱々しい抵抗だった。

「どうしても、というのなら、諦めるけど、飛び降りる前に、お姉さんと、お話してほしいの」

子供に言い聞かせるように、ゆっくりと話した。実際、子供だった。美羽の半分も生きていないだろう。細い手首が折れてしまいそうだった。

少女の目から涙が溢れ出した。

小さく頷いた。

その間にも、少女の時計の針は進んでいた。

美羽は無言で少女を抱きしめた。

辛かっただろう。どうしていいかわからなかったはずだ。何かあったか話したことで、少し落ち着いた様子だった。

美羽はまだ彼女の手首から手を放していなかった。最後に決めるのは少女自身で、その意思を尊重する気持ちはある。本心は、ずっと手を放したくはない。他の人に知られたら、非難されることがわかっていても。

「わかった」

少女の決意は、揺るがなかった。

美羽は震える手を解いた。自分自身の無力さが震えに現れていた。

本人の判断に委ねるしかない。たとえ子供でも。いくら話を聞いて理解した気になっても、他人にわかるわけがない。

自殺する気持ちなんて、死んだ人間にしかわからない。思いとどまった人間は、自分の気持ちがわかったただけだ。決して、他人の気持ちがわかるわけではない。

少女は立ち上がった。

ありがとう。

彼女は言った。

遠くに海辺が見えた。ビルの上は風が強い。少女はゆっくりと足を踏み出した。

美羽は少女の肩を抱きとめた。

静かな目が美羽を見上げていた。

「あなたの魂を救わせて」

唇があわさった。

美羽と少女のやりとりを、秀樹は陰で見守っていた。

「あ」

二人の身体が重なり、たった数秒で少女の渦が消えたことに気づいた。

少女は糸が切れたように力を失った。美羽が少女の体重を支えきれず、尻餅をついた。それでも少女の体を放さなかった。

「何があっただんですか」

秀樹が近寄ると、美羽は肩を震わせていた。少女の腕がだらりと地面をこする。顔を覗き込むと、時計が失われていた。

「その子は……」

すすり泣きがした。美羽が首を振った。

秀樹はどうしていいかわからなかった。

しばらくして、美羽が少女を地面に横たえた。

「死んだのよ」

「死んだ？」

秀樹ははつとして、もう一度、少女の顔を見た。白く幼い顔だった。
「死……」

そうだったのか。命を刻むという言葉のとおり、あの時計は生きて
いる証だったのかもしれない。それが消えたのは、この世から去っ
たことを意味する。

秀樹は自分の頬を撫でた。

時計のない自分は、なんなのか。背筋に冷たい汗を感じた。

「自殺はさせたくなかったのよ。自分で命を絶てば……聞いたこと
あるでしょ？ 地獄へ落ちるって」

美羽は少女の乱れた制服をなおしてやった。吹き止まない風が服の
裾を持ち上げ、また整える。

「魂が穢れるからよ。だからね、私たちがそうならないようにして
いるの」

「地獄……魂？」

馴染みのない単語が秀樹の頭を掻き回した。何を言っているのだろ
う。それに、自殺？

「その子、自殺……した？」

「いいえ」

美羽は少女の服をなおすことを諦めて、秀樹の方を向いた。目が赤
い。涙のあとだった。

「私が殺したの」

微笑みが心を揺さぶった。

「殺し……？」

少女に怪我らしいものはない。でも、死んでいるようだった。美羽
がやったというのか。

美羽は泣いていた。そして、笑っていた。本当に笑っているのか。
人を殺して笑える人間がいるのか。

「生きていけないって言ってた。男の子には想像もできないでしょ
うけど」

少女に何があったのかわからなかったが、死にたくなるくらい辛い

ことがあったのだらう。自殺したくなるような出来事が。

「誰かが殺せば、自殺じゃない。地獄に行かないですむでしょう。

……わかる？」

理屈はわかる。だけど、殺した人間はどうなるのか。

「地獄へ行くかもね。わからないわ。私はまだ死んでいないし」

美羽は秀樹の手を取った。

暖かい手だった。

「今日、君を見つけたのは偶然……だったのかな。でも、私がここに連れてきたのは、私の意思だからね」

美羽が立ち上がった。秀樹もつられて立ち上がる。

「もし」

美羽は言い淀んだ。

「よくはわかりません。だけど」

秀樹は手を握り返した。

「仲間と言ってくれました。僕は」

一人ではなかった。

嗚咽が言葉を消し去った。それでも、美羽にはわかったようだ。強く、抱きしめてくれた。

二人は、少女を風のない屋内に入れた。そこなら、服が乱されることもないだらう。少なくとも夜になれば、見回りの警備員に見えさるはずだった。

「名刺ってビジネスっぽくて、好きじゃないんだけど。裏に住所が書いてあるから」

美羽は両面印刷の名刺を取り出し、秀樹に渡した。

「Grim Reaper」

「あら、よく読めたわね。普通わからないものよ」

美羽は感心した。英語だから字面で読むのは難しくない。意味も何となくわかった。

「死神」

「素質があるのかも」
あまり良い褒め言葉ではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3638o/>

Grim Reaper - birth

2010年10月17日18時14分発行